

2020 年度 小委員会活動成果報告

(2021 年 2 月 9 日作成)

小委員会名	バイオクライマティックデザイン小委員会	
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (熱環境運営委員会)	主 査 名：金子 尚志 就任年月：2019 年 4 月 委員長名：持田 灯 主 査 名：永田 明寛
設 置 期 間	2019 年 4 月 ～ 2023 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 持続可能な都市・建築の実現に寄与するパッシブ技術のデータベース化 ・ 住まい手の環境調整行動を考慮した建築環境システムの評価手法の構築 ・ 地域気候に適した自然環境ポテンシャルの有効な活用策の検討 	
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：有	
	主査：金子 尚志 (滋賀県立大学) 幹事：高田 真人 (熊本大学) 委員：宇野 朋子 (武庫川女子大学), 菊田 弘輝 (北海道大学), 源城 かほり (長崎大学), 小玉祐一郎 (エステック計画研究所), 齊藤 雅也 (札幌市立大学), 宿谷 昌則 (東京都立大学), 菅原 正則 (宮城教育大学), 須永 修通 (首都大学東京), 築山 祐子 (旭化成ホームズ), 畑中久美子 (岐阜市立女子短期大学), 長谷川兼一 (秋田県立大学), 廣谷 純子 (みつつデザイン研究所) (50 音順 敬称略)	
設置 WG (WG 名：目的)	熱環境への 適応 検討 WG (委員 11 名)：地域に備わる自然のポテンシャルを活かす建築・都市環境デザイン (バイオクライマティックデザイン、以下 BD) を推進するためには、ヒトの中立温度、受容範囲、暑熱寒冷限界、想像温度などの季節性・地域性を解明することが必要である。また熱的快適性と熱環境適応の効果と限界を理解することは、BD 設計ツールへの活用が期待される。本 WG では、既往の学術的知見の整理、各地の実態調査により、熱環境適応の効果と限界、設計への活用を検討する。	
2020 年度予算	170,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s14/

項 目	自己評価
委員会開催数	3 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は 除く)	1. なし (小委員会として、「設計のための建築環境学 みつける・つくるバイオクライマティックデザイン (彰国社)」(3 月刊行予定) の改訂に協力)
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	
大会研究集会	1. なし
対外的意見表明・パ ブリックコメント等	

<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小委員会を3回開催(第3回は2021/3に開催予定)し、幅広い情報交換と討議を行った。 2. バイオクラマティックデザイン改訂本作成小委員会と協力し、既刊「設計のための建築環境学(彰国社)」の改訂版を2021年3月に出版できる運びとなった。
<p>委員会活動の問題点 ・課題</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 既刊「設計のための建築環境学」(彰国社)の改訂版出版に集中したため、本小委員会自体の開催回数が減少してしまった。 2. 主査・幹事をはじめ委員が全国各地に散らばっているため委員旅費の工面が困難であったが、コロナ禍の影響でオンラインでの委員会開催が主体となったため、期せずして解決された。しかし単なる会議開催だけに終わらせず、新たな開催方式により対応した形式を模索していく必要がある。 3. 既刊「設計のための建築環境学」の改訂本の出版に合わせて、2021年度の建築学会・大会ではOS(オーガナイズドセッション)の開催することとなったので、準備する必要がある。

2020 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p><u>小委員会の活動</u></p> <p>本バイオクライマティックデザイン小委員会の2020年度の主な活動成果は、バイオクラマティックデザイン改訂本作成小委員会と協力し、既刊「設計のための建築環境学（彰国社）」の改訂である。既刊の執筆者だけでなく、本小委員会の会員も協力した結果、2021年3月に出版できる運びとなった。また委員会を年度内に計3回（第3回は2021/3に開催予定）開催した。</p> <p>加えて本小委員会は、2020年10月にオンライン開催された熱環境研究交流会（主催：熱環境運営委員会）へ参加し、他の小委員会との交流を行った。また「設計のための建築環境学」（彰国社）の改訂版の出版に合わせて、来年度の日本建築学会でOS（オーガナイズドセッション）を1件申請し、承認された。現在（2021年2月）、OS参加者を募集中である。</p> <p>しかしながら既刊「設計のための建築環境学（彰国社）」の改訂に注力しすぎたため小委員会の開催回数が例年（通常、4～5回開催）よりも減少してしまった。またコロナ禍の影響で会議の形式がオンラインのみとなったが、それに対応した形式をもっと模索する必要があった。次年度以降は、その点についても考えていきたい。</p> <p><u>委員会内WGの活動</u></p> <p>熱環境への適応検討WGでは、昨年度までの活動で得られた知見をとりまとめ、WGとしての活動を一旦完了させ、解散させることとなった。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。